



授業にはJICAが作成した開発教育教材もフル活用

知の分野。市内にあるJICA筑波の図書館に足を運ぶなどして、教室から世界について学べる内容を考えた。そこで決まった授業のタイトルは「わたしたちは地球家族」。開発途上国で何が起きているのか、日本はどんな国際協力を行っているのかについて学ぶ授業だ。「世界の約150カ国が、途上国」と言われています」「えーっ!?!」



昨年末にはそれぞれのグループで学んだことを発表。「世界には知らないことがたくさん!」

6年生も終わりに近づいたこの日、「つくばスタイル科」の授業のまとめとして新聞作りに取り組みることになった。これまで学んできたことを、全学年の子どもたちにも知ってもらいたいためだ。「何かしたいな」と思ってもらえるようなメッセージ

そこで次は、医療・水・衛生、食料、学校、紛争など、グループごとにテーマを決めて調べてみることに。「環境破壊は僕たちの生活にも原因があるんだね」「子どもが戦争で戦わないといけないの?」「学校に行けるのは当たり前だと思ってた」。ふたを開けると、そこは知らないことだらけ。授業を重ねるごとに、遠く離れた途上国で暮らす人々たちへの思いが強くようになっていっているように見えた。

みんなに広めて行動につなげよう

将來、国際協力の道に進むかは分からない。それでもこの授業を通じて世界の問題を知り、日本での生活を振り返り、今できることを自分の頭で考えてほしい。それこそ、子どもたちに期待していることだ。「途上国について知ることが私たちも楽しい。子どもたちと一緒に勉強していきたいと思っています」と、6年生の先生たちは話す。桜南小の国際協力はまだ始まったばかりだ。書きたいことが盛りだくさんで、この日は完成まではいかなかった新聞作り。

「学校に行けない子どもたち」について調べた照井大和くんは、「先生もいない、教科書もない子がいることを伝えたい」と真剣なまなざし。「食べ物も十分ない人もたくさんいるのに、僕たちが好き嫌いしたらいけないよね」。そう話しているのは、食料問題を担当した高橋悠太朗くんのグループだ。どのグループも、書いては消し、書いては消しの繰り返し。2時間連続の授業だったが、休み時間も席を立たずに、手元の紙にらめっこしていた。「自分で調べて考えることで、今の生活が幸せだとより実感することが出来ます。自分たちももっとがんばらなければと感じているようです」と坂本先生。「家の近くにフェアトレードのチョコレートを買える店を見つけました。身近なところできるところを探したい」と、山本さくらさんは目を輝かせる。

子どもたちが懸命に考えたメッセージは、きっと多くの人の心に響くはず。この街の未來を担い、日本も世界も元気にする子どもたちが、「つくばスタイル科」を通じてたくさん育ってくれることを期待したい。

「この資料を使えばいいんじゃない?」自分で考えることが行動につながる



毎週火曜の5、6時間目は、通称「つくスタ」の授業

“つくばスタイル科”で国際協力!

国や企業の研究機関が集まる茨城県つくば市。小中一貫教育の特色の一つとして市が導入したカリキュラム「つくばスタイル科」に国際協力について学ぶ授業を取り入れたのが、つくば桜並木学園つくば市立桜南小学校だ。

世界のためにできることを知る

都内から電車で一本。約50分揺られていると、日本最大の学術都市として知られる茨城県つくば市が見えてくる。広い空間に自然溢れる環境で、東京のベッドタウンとしても人気が高い。



授業で子どもたちがまとめた資料



国際協力について学んだことを新聞にまとめる子どもたちと坂本先生

世界とつながる教室